

「子どもとことば」考

—ことばの獲得と言語環境の問題—

千古 利恵子

社会の ICT 化は、対面コミュニケーション力の低下を助長し、人間関係の構築を妨げる一因と考えられる。コミュニケーションは無音で行われ、言語外での感情や想いを汲み取ることが不要とは言わないまでも、最重要視されなくなる社会がくるのではと危惧される。保育現場は、幼児期のことば獲得を支えるために、「言語環境」の検証が必要だろう。本稿では、改善に向けての私見を述べるものである。

キーワード：ことば、コミュニケーション、言語環境、教育玩具、ICT 化

1. はじめに

社会の ICT 化は、対面コミュニケーション力の低下を招き、人間関係の構築を妨げる一因と考えられるだろう。近年、社会人基礎力として「コミュニケーション力」が重視され続けていることは、まさにこの状況を示唆しているといえる。現状の改善と新時代の人間関係を考える上からも、幼児期の言語環境の検証は保育実践の重要な課題の一つになる。先学諸氏が幼児期の「言語獲得」を生活環境と関連付ける理由も茲にあるのだろう。

2. 社会環境の変化と幼児教育

子どもの言語獲得は、「遊び」の中で進む。生活の中心に「遊び」があるこの時期は、言語環境は「遊び」そのものと言える。さまざまな玩具、むしろ「知育玩具」と称され販売されているものに囲まれていることから、その質に注目することが必要になるのである。一枚の紙で作られていたカルタや双六、福笑いなどは影を潜め、電子メディアを活用したゲームやアニメが台頭している。乳児期からスマホに馴染む現代

では、電子機器から流れる音声から「ことば」を聴き始めるのかもしれない。総務省は情報通信機器の利用動向を調査し、集計結果を HP 上に公表している。平成 30 年度版「情報通信白書」（第 2 部 第 5 章 第 2 節「ICT サービスの利用動向」）に掲載する「モバイル端末の保有状況」「インターネットの利用状況」は以下の通りである。

1 インターネットの利用動向

イ モバイル端末の保有状況（個人）

●個人におけるスマートフォンの保有率は前年とほぼ横ばい。2017 年における個人のモバイル端末の保有状況を見ると、スマートフォンの保有率が 60.9%（前年差 4.1 ポイント上昇）であり、モバイル端末全体（携帯電話・PHS 及びスマートフォン）の保有率は 84.0%（同 0.4 ポイント上昇）と、前年と比べてほぼ横ばいの結果となっている

1) インターネットの利用状況

ア、インターネット利用率（個人）

●スマートフォンでのインターネット利用がパソコンを上回る 2017 年のインターネット利

用率（個人）は80.9%となった。また、端末別のインターネット利用率は、「スマートフォン」（59.7%）が最も高く、「パソコン」（52.5%）の利用率を上回った

●インターネット利用の世代間や年収間の格差はいまだに存在。2017年における個人の年齢階層別インターネット利用率は、13歳～59歳までは各階層で9割を超えている。また、所属世帯年収別の利用率は、400万円以上の各階層で8割を超えている

●多くの都道府県でスマートフォンによるインターネット利用率が半数を超えている。利用端末別に見ると、41の都道府県でスマートフォンでの利用率が50%を超えている

第2節 ICTサービスの利用動向

●大都市圏を中心にインターネット利用率、スマートフォン利用率が高い。地方別のインターネット利用率は、南関東、北陸、東海の順に高く、スマートフォンでの利用率は、南関東、北海道、近畿の順に高い。いずれの利用率も高い南関東は、インターネット利用率が85.8%、スマートフォンでの利用率が66.2%となっている

●インターネットの利用目的は、「電子メールの送受信」が最も多い。インターネットの利用目的については、「電子メールの送受信」がほぼすべての年齢層で高くなっている一方、「ソーシャルネットワーキングサービスの利用」や「動画投稿・共有サイトの利用」では世代間での差が大きくなっている。このうち、ソーシャルネットワーキングサービスについては、40～69歳の各年齢階層で利用率が上昇している

www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/

2018.10.10

同白書には、2017年度の「インターネットの

利用者の割合」も掲出されている。本学学生が大半居住する府県では、次のような状況である。

【滋賀県】(1,003)：総数 82.3

パソコン 54.1 携帯電話 8.2 スマートフォン 61.4 タブレット 23.6

【京都府】(738)：総数 85.5

パソコン 59.6 携帯電話 10.3 スマートフォン 63.4 タブレット 24.9

【大阪府】(756)：総数 82.9

パソコン 54.5 携帯電話 10.3 スマートフォン 64.1 タブレット 21.6

3府県ではインターネット利用者率が60%を超えている。白書が示すように、現代人の生活にスマートフォンが不可欠になり、コミュニケーションは「電子メールの送受信」でなされ、人間関係の構築は「ソーシャルネットワーキングサービスの利用」で成されて行くのである。その是非はともかく、今後さらにこの傾向が強まることは否めない。しかも、その所有者の年齢が下がり続けるならば、他者とのコミュニケーションはLINEやTwitter、インスタグラムなどの「ソーシャルネットワーキングサービス」に依存する傾向が高まる一方である。子どもの生活環境もその中に有る以上、同様の状況に飲み込まれるのである。既にネット依存が問題にされているように、子どもの日々はネット情報に支配されてゆくのだろう。子どもの言語環境を検討するには、情報取得方法の変化を切り離すことはできないのである。

2011年、文部科学省は「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の方向性」を提示し、幼児期の重要性を明記している。

【人の一生における幼児期の重要性】

人の一生において、幼児期は、心情、意欲、態度、基本的生活習慣など、生涯にわたる人間形

成の基礎が培われる極めて重要な時期である。幼児は、生活や遊びといった直接的・具体的な体験を通して、情緒的・知的な発達、あるいは社会性を涵養し、人間として、社会の一員として、より良く生きるための基礎を獲得していく。

その上で、子どもが育つ社会の変化を「地域社会の教育力の低下」「家庭の教育力の低下」の2点から解説し、今後の教育の取り組みの方向性を以下のように示している。

- 1 家庭・地域社会・幼稚園等施設の三者による総合的な幼児教育の推進
- 2 幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実

さらに「幼児の『日々の生活』という観点からは、幼稚園等施設での生活と家庭や地域社会における生活の連続性が確保されていることが必要」と締めくくる。

「日々の生活」が人としての基礎を作ること、は、文部科学省の文言を見るまでもない。「生活の連続性が確保」されるには、幼児教育現場で為されているさまざまな取り組みが重要である。しかし、子どもの言語表現を注視すると、家庭での言語環境の整備が急務であることに気付かされる。

3. コミュニケーションとことば

教育現場では、就学後から高等教育終了まで読書推進が盛んである。読書がコミュニケーション能力育成に直結しているというより、コミュニケーションに必要な人格形成に有益と考えるからだろう。

円滑な社会生活が営める「人間」であるには、言葉を自由自在に使いこなす、他者とのコミュニケーションを図る力が必要という共通認識が

ありそうだ。では、「言葉を自由に使いこなす」ために必要なものは何か。大人の場合、それは「思考力」といえるだろう。他者と言語でコミュニケーションを図る時、自身が獲得している語彙を如何に組み合わせ文章化すれば、想いや考えが伝えられるかと考える。即ち「思考」し続けるのである。だが、幼児のコミュニケーションは大人のような「思考」を伴って行われてはいないだろう。瞬間の感情や感覚を数少ない獲得語彙に置き換えるだけである。感じたままを言葉に乗せる、とでも言えば良いのだろうか。子どもの言語コミュニケーションは他者の存在を確認して行われない状況があることから、コミュニケーションの考察は、成長段階と「ことば」の獲得の状況を外しては行えないと考える。

『幼稚園教育要領』では、「言葉」の教育を次のように記す。

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

また、以下の通り「ねらい」を示し、具体的な「内容」10項目挙げた上で、「内容の取扱い」を4項目にまとめている。

1 ねらい

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。

3 内容の取扱い

- (1) 言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児とかかわることにより心を動かすような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。
- (2) 幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。
- (3) 絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。
- (4) 幼児が日常生活の中で、文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること。

「内容」10項目の「(8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。(9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。」は、「体験」が事象に対するイメージや想像力を育み、「言葉」への関心に繋がると記す。さらに「内容の取扱い」では、「言葉の獲得」は、人に接して自分の感情や意思を伝達し、その時の相手の言葉を聞く体験の蓄積によって為されると記している。「聞く」ことを通して「話の理解」が可能になり、「言葉に対する感覚」が養われ、やがて「文字に対する興味・関心」へと発展すると述べる。言語教育は「話す」ことから「聞く」ことに、「聞く」ことから

「書く」ことに「ことばの獲得」が進むことを念頭に、教育方法の開発や児童文化財の選択が行われなければならないのである。

近年、幼保の連携は『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』の統合への取り組みからも、伺えよう。『保育所保育指針』では、保育の環境を「人的環境、物的環境、自然や社会の事象」と捉え、保育現場ではそれらが相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものになるように、計画的に構成することが必要であることを記している。人との関わりについては、「子どもが人と関わる力を育てていくため、子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくことができる環境を整えること。」とあり、コミュニケーション力の育成の環境整備を促している。幼保の取り組みは、大差無いといえよう。しかし、ここでいう環境整備とは何を指すのだろう。言語教育の観点から、言語環境に対する両者取り組みに注意する必要があるのではないか。

言葉の獲得に関する課題は多く、その研究は思考・教育・環境・文化財との関係から検証がなされ、報告されている。今井むつみは、ことばを学ぶなかで子どもの思考が発達することを詳細に検証する。信号機の「進め」を「青」というか「緑」というか、意識しているかということ为例に、次のように述べている。¹⁾

言語と思考の関係を考えるときに大事なのは、例えば「青と緑を区別する言語」と「青と緑を区別しない言語」のように、違う言語の話者が同じか違うか、という問題意識だけではないことを私たちに気づかせてくれる。わたしたちが、無意識に何気なく見ている世界の見方や記憶に、ことばは大きな影響を与えていることを、この実験は教えてくれるのだ。

「信号が青になったから進もう」という人と

「緑になったから進もう」という人では、信号機の色が示す意味理解が異なるわけではない。異なる語彙を用いてはいるが、信号機の色が示す意味の理解は共通しているのである。しかし、同じ語彙を用いてはいても異なる場合がある。例えば「面白いね、この映画」と二人が言ったとする。しかし何を「面白い」と表現しているのかは、分からない。同じ「面白い」という言葉であっても、話者が異なればその意味には違いが生じるのである。今井が述べるように、言語と思考の問題は話者と「私」の関係の認識が重要になるのである。人は成長する中でこのような体験を重ね、1つの事象を表現するために適した言葉を、自身が獲得した語彙から選択するようになるのだらう。この世には無数の事象が存在するため、その一つを他と区別するには言葉を選ぶ必要があることに気付くということなのだらう。だが、幼児期は、目にする事象が異なっていくように、自身が獲得している一語で表現するという段階である。「プープー」は総ての車を意味し、「ワンワン」は総ての犬を現すように、である。成長に伴い、複数の事象を区別し、異なる事象を表現する言葉が多数存在することを知る。言葉とその意味を理解するには、多くの言葉に出会う経験が不可欠である。多くの言葉との出会いは人との関わりーまさにコミュニケーションの体験ということになる。コミュニケーション力は、この体験量に左右されるといえるのだらう。体験が多いか少ないかによって、他者が使用する言葉の意味の多様性の理解度は異なると考える。

『幼稚園教育要領』に示す「ねらい」は、その体験が生活環境と密接に関わることを、具体的に記しているといえる。従って、コミュニケーションとことばの問題は、『幼稚園教育要領』の「ねらい」に記す「表現する楽しさ」「伝え合う

喜び」を味わえる環境を考えることと合致するのである。

4. ICT 化社会の言語教育

言語感覚や言語表現は、時代によって異なることはいうまでもない。国語教育の中で行われる、現代語・古語の「文法学習」は、言語と時代の関係を知るためには必要といえよう。だが ICT 化が進む現代に、従来通りの「文法学習」ー主に「口語文法」の学習が重要かと、疑問視するのは筆者だけかもしれないが、検討の余地はあるだろう。

言語環境は一変し、言語感覚・言語活動をもその渦に巻き込んでいる。当然、人間関係のあり方にも及び、コミュニケーションの手段や方法も新たな時代を迎えている。子どもがことばを獲得する環境も、この変化に準じていくのである。学校教育ー特に義務教育課程では、ICT の影響を最小限に抑えようとしているように感じるが、難しいだろう。教科書はタブレットに置き換えられる日も近く、表記文字に触れる環境は、紙面から液晶画面に移行している。漢字表記のきまりを厳しく指導していた義務教育では、この変化の中でどのように対応すべきかが課題となるだろう。文化庁は、漢字表記を「文化」の視点からとらえようとしており、文部科学省の「漢字の正しい表記の教育」より、社会の変化に順応しようとしているようだ。²⁾

川島良太は、テレビ・ゲームやスマホが子どもの学力に与える影響を検証し、以下のように述べている。³⁾

平成 26 年当時の一般的なゲームは、空間的な情報処理能力を必要とするものが多く、ゲームを行う習慣がある人の方が空間情報処理能力が高いことは、多くの論文で報告されています。(中略) 一方、当時は特

別に高度な言語能力を駆使する必要があるようなゲームは、私の知る限りありませんでした。よって、ゲームをすることで言語能力をたくさん使うことはないため、国語の成績には、負の影響しかないのではないかと考えました。

この検証が、国語の成績が、言語感覚・言語表現力を100%示すということではなく、ましてコミュニケーション力の有無を図るものではないことは言うまでもない。しかし、現代の子どもの言語教育を検討する上で、川島の指摘は重要な情報といえる。

5. ことば獲得と「児童文化財」の役割

子どもがことばを獲得する上で、「児童文学」は重要な役割を担い、コミュニケーションの場面を知るための重要な「児童文化財」の一つとして位置付けられる。⁴⁾ 幼児期においては「児童文学」の一つである「絵本」が、コミュニケーションの場面に出会い、ことばの獲得を促す重要な役割を担うといえる。

5-1 絵本の役割

「絵本」は保育の実践で頻繁に使用されている。その目的は、「ことば」で表現されている情景や思いに触れる、あるいは感じさせるねらいもあつてのことだろう。実習を終えた学生の多くが、十年一日の如く「絵本の読み聞かせをしたら、子どもたちが喜んだわ」と、話す。「楽しく遊ぶ」ことを重視する保育の観点からすると、問題は無いが、「ことば獲得」という観点に叶っていたのか、という振り返りは行われていない。集中力を引き出すために使用する場合でも、「ことば獲得」への影響を念頭に置く必要があるが、軽視されている。その原因は「絵」と「文字」の関係にありそうだ。

「絵本」と呼ばれる書籍は、内容の大半を「絵」で描き、「文字」は脇役のような存在である。言語獲得が不十分な幼児期には、「絵」が「主」で「文字」が「従」の配分になる作品が適しているが、就学前には「文字」が「主」になるものを選び、「文字」理解を促すことが重要だろう。

松岡享子は、『『あかちゃんから絵本を』』という声があちらこちらから聞こえてきます。でも、わたしは、子どもが自分から強い興味を示すのでなければ、無理に早くから読む必要はないと思っています。(中略)絵本に手をのばすまえに、もっと大事なことがあるのではないかと思うからです。それは、ことばの土台をつくることです。」と述べる。⁵⁾ さらに、「本を読む」ためには「ことば」が必要であり、「ことばの土台づくり」が重要だと指摘する。

近年、3歳児頃から「ひらかな」の練習に取り組もうとする動きは、出版物の多さからもうかがえる。2歳児がスマホを器用に扱い、様々な画像や音声にふれているように、ICT化が進む社会では、子どもが喃語での表現を卒業し、ことばを獲得する年齢は急速に早まっているのである。保育現場での「ことばの土台づくり」の実践検証は、松岡の指摘からも重要になるだろう。また、正高信男は「言語の習得とは、子どもにとって身体全体を巻き込んでなされる営みなのだ」と表現してかまわないだろう。⁶⁾ とテキスト偏重を戒めている。

「絵本」を準備する時、保育者や保護者は「ことば獲得」と「絵本の役割」をどの程度意識すればよいのか、判断する難しさが茲にある。

5-2 変化する「ことばの教材」

リリアン・H・スミスは『児童文学論』で「過去に書かれた最善の本に親しむことによって得たものを子どもの本を評価するものさしとすべ

きだ」⁷⁾ と言い、脇本聡美は「絵本が子どもに字を読ませたり、読解力を身に付けさせるためのツールであると考えたべきではない。」と述べる。⁸⁾ 現存する「ことばの教材」はあまりにも多い。店頭でも Web 上でも、子どもに提供できる「ことばの教材」は際限なく作りだされる。多くは知育教材と称し、保護者の心を捉える。まして 0 歳児からの通信教育も誕生し、「1 歳児代は名詞」を「2 歳児代は形容詞」を理解し、考える力の土台がで始めるなどの宣伝文句を目にすると、保護者は悠長に構えてはいられない。保育現場に、ことばの教育の取り組みを求めるようになるのも、否めない。「ことばの教材」の選択が、スミスの言う「最善の本に親しむ」ことよりも、脇本が否定する「字を読ませたり、読解力を身に付けさせるためのツール」を優先する傾向は、ますます強くなってゆくのだろう。ネット上に無料の「ことばの教材」が存在することも、この傾向を助長する要因といえそうだ。例えば「書く」練習の第一歩として点から点までを結ぶ線を書くプリントや、「あいうえお」を覚えるためのカルタなどが、無料でダウンロードできる。無料であれば「一度、与えてみよう」という気持ちになるだろう。これらは「書く」ことに重きを置くようだが、練習時には傍らの大人からの言葉掛けが当然ある。「書く」練習ではあるが、傍らから発せられる大人の言葉が耳に入り、聞こえてくる言葉の獲得が優先される可能性も考えられる。無料の「ことばの教材」は、子どもの言語獲得の環境に変化を及ぼしているのである。

5-3 言語活動と子どものことば

子どもと向き合う大人の言語活動は、時代の変化に応じた柔軟な対応がなされている。しかし「獲得させることば」は、観念として「教科

書に記される正しく美しいことば」に終始するのではない。茲に、言語教育と現代社会の様相とのギャップが生まれ、「言語表現」に対する世代間格差が問題になると考える。

幼児期の子どもには「正しいことば、表現」に触れさせるべきだが「正しさ」の基準は揺らいでいる。例えば「食べれる」は誤りで「食べられる」が正しいとされていたが、「ら」抜きことばが頻繁に使われるようになり、文部科学省も「ら抜き」を容認するようになった。「全然大丈夫です。」という表現が頻繁に使われると「全然」は肯定文に用いられる語のような印象を与えられてしまう。疑問文の表記においても、疑問の助詞「か」と「？」の併記に違和感を覚えない。何より、文章を書く指導では、「話し言葉」と「書き言葉」の区別を明確にさせていたが、「けど」「なので」などを用いた文章が多く、この状況に歯止めをかけることは難しいと感じる。子どもを取り巻く言語環境は日々変化し続ける。名著と言われる児童文学でも、現代の子どもに提供するに相応しいものかといえ、無条件には肯きがたい。児童文学は、「大人と子どもの関係」「人と社会の関係」を問い直し、コミュニケーションに不可欠な「柔軟な思考」を育てるためのものと言える。そうであれば猶の事、児童文学の選書は、言語環境を整備する上で、注意深く扱われなければならない。

川越ゆりは、宮部みゆきの長編ファンタジー『ブレイブ・ストーリー』(2003)を中心に、現代児童文学における子ども像や子ども観について考察し、「現代社会の中で、子どもが彼らなりの方法で内的拠点を得、多様な現実を生き抜くというときに、どのような後押しが必要とされるのだろうか。彼らにとって、生きる励みとなる大人像とは何なのか。新しい子ども観の確立と切り離せない問いだろう。」と問題を提示して

いる。⁹⁾子どものことばとして相応しいものは何か、という問いに答えるのは難しい。「子どもに相応しい言葉」を定義するならば、「子ども観」に基づくといえるのではないか。「子ども観」の捉え方は、その時代を生きる「大人」が決定する。言語活動における適正・妥当性は、大人の判断に委ねられているからである。

5-4 「話し言葉」と「書き言葉」

こどもの言語獲得は、「話し言葉」から「書き言葉」へと進む。「絵本」はこの移行に重要な玩具の一つと言える。例えば、「車」は「ブーブー」という「話し言葉」で表現し、やがて車種を言い分けるようになる。目の前を走る物体を他の物体と見分けて「車だ」と話す段階を経て、「絵」を見ながら「パトカー」「消防車」「ダンプカー」と物の名前を使い分ける段階へと進む。「話し言葉」から獲得した事象のイメージは次第に細分化され、あらたな言葉が獲得されてゆくのである。「話す」経験が十分為されなければ、「描かれた形」を見て、実物を想像することは、難しいことかもしれない。それは物の名に限ったことではないだろう。言うまでもなく、子どもにとって「話す」経験は遊びの中で行われる。「ことば」が人との関わりを楽しくするためのツールである以上、「言語獲得」も楽しく行うのがよいと考える。従って「絵本」は「ことばの教材」として扱うのではなく、「話す」遊びに使う「玩具」として、子どもに提供するのが良いと判断するのである。

では、子どもが楽しむための玩具として「絵本」を準備するなら、どのような内容のものを選ぶか、大人の選択眼が重要になる。「知育」「早期教育」に傾斜した記号としての「ことば」を列挙したものより、日々の生活に実存する事象を多くの「絵」に描いた作品が良いのではない

だろうか。その体験こそが、文字への興味を駆り立て、「書く」ことの楽しみを知ることになるはずである。

「話し言葉」から「書き言葉」への移行が円滑に行われなければ、就学後の「書き言葉」に重きを置く学びは、様々な課題を生むことになる。「ことば獲得」の問題は「話し言葉」「書き言葉」両面からの考察が必要になるのである。

5-5 ことばと性差

日本には、ことばを「男性語」と「女性語」¹⁰⁾に分ける文化があり、「児童文学」では、男女の言葉遣いに違いが設けられている。しかし、現実社会では、その使い分けが揺らぎ始めている。山中靖子は、「現代日本語の性差に関する研究—文末表現を中心に—」¹¹⁾において、「女性側のことばが男性に近づいている」という従来の研究結論を問い直し、新たに「女性による男性語の使用状況とその使用理由に関する調査を実施し、なぜそのようなことば遣いをするのかという女性側の言語使用意識」について考察している。調査は、東京都内の女子大学生102人、男子大学生は74人から得たデータを分析し、「な」「だろ」「よな」などの文末表現の変化を検証している。その上で、「使用することば遣いによって、その人自身の印象は大きく変わる。そのことを踏まえた上で話していても、自分が相手に与えるだろうと思っている印象と、相手が受ける印象とは必ずしも一致しない」ことのこわさを指摘し、「その場その場に合ったことばを選択し運用していくというスタイルが定着していくであろう。」と「男性語」と「女性語」の今後を論じている。

性的マイノリティへの配慮がなされるようになったとはいえ、他者の存在を認知する上で、性差は無視できない。「女の子らしい言葉遣い」「男

の子みたいな乱暴な言葉」などといわれるように、特に「話し言葉」は性差とは切り離せないと捉える風潮は、今しばらくは存在するだろう。初等教育での英語必修と企業のグローバル化に伴い「男性語」「女性語」を使い分ける日本語の「話し言葉」の特性は次第に失われてゆくだろう。手紙文の結語「かしこ」は女性語とされているように、「書き言葉」にはごく稀に性差は存在するが、「書く」行為の中で、性差を意識する人は激減しているはずだ。

6. ICT 化社会の「子ども」

脇本聡美は、映像メディアは「子どもを絵本から遠ざけ、子どもの想像力を豊かにする機会を奪ってしまうだけでなく、子どもの脳（こころ）の成長にも害を及ぼすことを認識しなければならない。」¹²⁾と、主張する。大人・子どもの区別なく、現代人が映像メディアからの情報を頼りに生活していることは、否定できない。社会の ICT 化により「大人」の生活様式が変わり「子ども」の暮らしも変わる。「児童文学」作品の場面に、タブレットやスマホで遊ぶ姿が描かれる時代であれば、それらを相手に室内遊びを楽しむ子どもを窘められるだろうか。

「子ども」は、その時代に生きる「大人」の人生観や価値観を受け継ぎ成長する。コミュニケーション力の欠如を憂い、その育成こそが自己肯定観や自己効力感に結び付き、現代社会に適応しづらい「大人」を減らせるという風潮がある。他者と同調できなければ「負の評価」を受けるという考えは、むしろ人との関係を恐れる人間を増やし、結果として言語表現の貧弱さに繋がるのではないのか。この風潮から脱出する方法を探るには、言語獲得が終盤に近付いた年齢の実態を知る必要がある。

OECD（経済協力開発機構）が実施する調査が

ある¹³⁾。15 歳児（義務教育終了段階）を対象に読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの三分野について、3 年ごとに実施される国際的な学習到達度に関する調査で「PISA 調査」と呼ばれている。2015 年の調査内容の一つに、「思考プロセスの習得、概念の理解、及び各分野の様々な状況の中でそれらを生かす力を重視。」がある。調査結果をふまえ、文部科学省は以下のコメントを発表した。

文部科学省としては、児童生徒の学力を引き続き維持・向上を図るため、

- ・学習指導要領の改訂による子供たちの資質・能力を育成する教育の実現や国語教育の充実
- ・「読解力の向上に向けた対応策」に基づく学習の基盤となる言語能力・情報活用能力の育成
- ・時代の変化に対応した新しい教育に取り組むことができる「次世代の学校」指導体制の実現に必要な教職員定数の充実

を推進してまいります。

このコメントから、文部科学省が「読解力の向上には言語能力・情報活用能力の育成が不可欠」と判断していることが分かる。そのためには国語教育の充実が重要と考えているのである。就学後の「国語」科のテキストが、その目的にかなうものかという議論がなされるのも、このコメントに注目すれば、肯けるだろう。

「ことば獲得」の最終目的は、事象を認識・分類し、課題を発見し、思考する力を身に付けることだ。近年、教育現場でアクティブ・ラーニングという語が盛んに使われる理由は、「主体的な学び」が継続できる人間に育つことが、社会人には重要だと考え始めた時代の要請があるからだろう。しかし、AI が「主体的な学び」への

移行を妨げようとするのかもしれない。新井紀子は、中高校生の「基礎的読解力」を調査するためのリーディングスキルテスト（RST）¹⁴⁾の結果を分析し、教科書が読めない一読解力の乏しい子どもの現状を明らかにしている。読解力が無ければアクティブ・ラーニングは出来ないのだという。さらに、読解力は何歳になろうとも養えるのだと、述べている。¹⁵⁾ AIが教育を変え、中高校生の「読む」能力に影響を及ぼしつつある今、読解力の育成を見据えた幼児期の「ことば獲得」の環境整備が要請される。社会の様相や人間関係が、どのような言語でどのように表現され、どのように暮らしているかを描こうとしているのか—ここに注目しながら子どもの「言語環境」は整備されるべきだろう。

7. まとめ

近年、少子化による一学年1クラス体制の小学校も増え、限られた仲間での生活から抜け出せずに悩む子どもが育っている。人間関係の問題は、低年齢化が進んでいるということだろう。そのこともあってか、主体性を育むことが重視され、発達段階に応じたアクティブ・ラーニングが推進されている。保育実践においても「子どもの主体的活動」が叫ばれ、「子どもの興味を維持する環境」の整備・提供が求められる。主体性の育成には幼児期からの「ことば」の獲得が不可欠であるが、この問題を「話し言葉」「書き言葉」「文字表記」の3者の関係から検証することは、容易なことではない。この3者獲得を支援するために、保育現場では様々な取り組みがなされているが、従来から高い評価を得た「絵本」を使用することが多いように、児童文化財の選択は一様の感がある。室内で洋服を着せられて暮らす犬と飼い主の生活を描いた作品よりも、葎屋根や煉瓦造りの暖炉が登場するような、

作品を優先する傾向が強い。「ことば」への興味を育むことをねらいとすれば、子どもの生活環境と乖離した作品が提供される状況は、検討の余地があるだろう。一方、情報端末機の利用状況に代表されるように、保護者の生活環境が多様化するに従い、その中で成長する子どもの興味・関心も多様になっている。一人一人の子どもに適した取り組みが必要にはなるが、保育現場の対応には限界があり、子どもの言語獲得にも差が生じているのではないか。幼児期の言語獲得の差は、就学後の学習問題や基礎学力の低下、社会人のコミュニケーション力不足などの問題を引き起こしかねない。

ICT化が一段と進む時代を迎え、子どもの「言語環境」がどこまで変化してゆくかは推測できない。だが、子どもの「言語獲得」の環境を整備するにあたり留意すべきことがあるなら、それは主体的に生きる「思考力」を育む児童文化財の準備だと考える。

注

- 1) 今井むつみ、ことばと思考、岩波新書、2018、pp、187～188、
- 2) 2018年度 国語問題協議会、研修会資料
- 3) 川島隆太、スマホが学力を破壊する、集英社新書、2018、p. 107、
- 4) 中坪史典編著、児童文化がひらく豊かな保育実践保育出版、2009、p.3
- 5) 松岡享子、子どもと本、岩波新書、2018、pp、56～57、
- 6) 正高信男、子どもはことばをからだで覚える、中公新書、2004、p.172
- 7) 石井桃子・瀬田貞二・渡辺茂男訳、児童文学論、岩波書店、1964、p.35、
- 8) 脇本聡美、「子どもの成長と絵本：子どもの翼がはばたくために」、神戸常盤大学紀要、第4号、2011、p.17、
- 9) 「児童文学からみる現代日本の子ども観」東北文教大学短期大学 チャイルドリサーチネッ (2018.10.1) www.blog.crn.or.jp/report/02/145.html
- 10) 『広辞苑』では、「女性語」を次のように記す。

「単語・文体・発音などにあらわれる女性特有に言いまわし。(中略) 現代語でも、接頭語の「お」、終助詞の「よ」「わ」などのほか、語彙・発音の面でも見られる。婦人語。」

文化庁は「国語に関する世論調査」を実施している。2010年では、「男女の言葉遣いの違いがなくなっていることについては、自然の流れでやむをえない」が増えているとの報告がある。

- 11) 「東京女子大学言語文化研究 (Studies in Language and Culture) 17 (2008)」, pp.87-100
- 12) (8) 参照。
- 13) 15歳児に関する国際定義に従って、日本では、調査対象母集団を「高等学校本科の全日制 学科、定時制 学科、中等教育学校後期課程、高等専門学校」の1年生、約115万人と定義し、層化二段抽出法によって、調査を実施する学校(学科)を決定し、各学校(学科)から無作為に調査対象生徒を選出した。調査には、全国の198校(学科)、約6,600人の生徒が参加。

- 14) AIに読解力をつけさせるための研究で積み上げ、エラーを分析してきた蓄積を用いて、人間の基礎的読解力を判定するために開発されたテスト。

- 15) 新井紀子、AIvs 教科書が読めない子どもたち、東洋経済新報社、2018、P.250

参考文献

- ・鈴木貴博、AI失業前夜—これから5年、職場で起きること、PHP ビジネス新書、2018
- ・柏木恵子、子どもが育つ条件、岩波新書、2017
- ・橋本俊詔、日本の教育格差、岩波新書、2015
- ・内田伸子、子どもの文章 書くこと考えること、東京大学出版部、2003
- ・小学校からの英語教育をどうするか、岩波ブックレット No. 922、岩波書店、2015
- ・今井 康晴、幼児の言語獲得に関する一考察 —ブルーナーの言語獲得論を中心に—、学習開発学研究、4号、2011

